

大島一郎教授・奥津敬一郎教授ご退任にあたり

岩本遠億

今年の3月をもって、大島一郎先生と奥津敬一郎先生が定年で神田外語大学をご退任になる。大学院言語科学研究科の設立と発展になくはならなかった両先生を同時にお送りしなければならず、残念でならない。

大島先生は、大学院設立に先立つ1991年4月、言語教育研究所の教授として本学に御着任になり、大学院の立ち上げのため、1年間大変なご苦勞をお願いしたと聞いている。1992年4月より日本語学専攻教授、1994年より研究科委員長代行、1997年度には研究科長として研究科の運営と発展のために御尽力であった。特に、1996年には肝臓の病から肺を患われ、重篤な御容体に陥られたが、再起を危ぶむ声が聞かれる中、先生は病の床を蹴って立ち上がられ、97年に研究科長に就任されたのであった。

大島先生は、日本史研究を基盤とする方言研究の方法を、情熱をもって学生に伝えられた。先生は方言学の研究方法のご指導にあたり、学生を八丈島へお連れになり、現地調査による言語研究の方法をお示しであった。方言学を学ぶ学生のみならず、言語教育学、理論言語学を学ぶものも八丈島の現地調査に御同行し、親しく先生から言語の現地調査の手解きを受けた。

奥津先生は、1992年4月、日本語学専攻教授として本研究科に御着任になった。奥津先生は1994年より3年間に亘って大学院の教務委員長を務められたが、文部省と本学の諸規定を厳密に解釈・適用なさり、公明正大な教務の運営を心がけておられた。あまりの厳密さに驚くこともあったが、奥津先生より教務委員長を引き継いだ私は、引き継いで始めて、何故それ程までに厳密な適用と運営を心がけられたか改めて教えられたように思う。

奥津先生は、海外での幅広い御人脈を通して、修了生が海外の大学へ日本語講師として就職する道を拓かれた。学生たちは、毎年韓国や台湾などで先生の御推薦で職を得てきた。本学の大学院のように新しい大学院の修了生が、このように海外で講師職を得ることが出来たのは、先生がこれまでに研究と教育を通して培われた多

くの人々との友好関係の賜物である。また、奥津先生は海外からの留学生を寛くお引き受けになり、懇意に、また忍耐強く御指導であった。今後これらの留学生が帰って行った大学と本学との間に人的な交流が続けられるであろう。そして、さらに修了生たちが海外で職を得る機会が増えるであろう。

私事に亙るが、大島先生、奥津先生は、私が最初に言語学を学んだ東京学芸大学教授杉田洋先生と御親交があった。そのため、何かに付けお心に留めて下さり、有難い限りであった。

両先生の御退任と時を同じくし、研究科の設立と発展にご功績のあった徳永美暁教授もご健康上の理由でご退任になる。日本語学専攻を建て上げて下さった先生方お三人が同時に御退任になり、寂しい限りである。日本語学専攻は新しい世代に引き継がれて行く訳であるが、先生方が据えて下さった礎の上に更に日本語学専攻を発展させていかなければならない。

大学院の設立当初から研究と教育に亙って研究科の発展のために御尽力賜わり、心から感謝いたします。